

第17回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第17回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇二二年度第17回「文芸思潮」エッセイ賞は、一六七篇という、昨年よりも半分ほどに激減した応募数でしたが、内容はたいへん充実しており、上位レベルの作品はむしろ多く、特に佳作から奨励賞の層の厚さから選考も白熱しました。今回も十代後半から八十年代後半までの広い年齢層と同時に、地域的にもアジア、太平洋と広い地域から寄せられ、それぞれの貴重な体験だけでなく、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評も含まれた、刺激的な内容でした。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、さらに最終選考作品選出ののち、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によつて七月三十日山梨県甲府市において最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮つて力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「奇妙な依頼」

平尾富雄

(神奈川県川崎市)

優秀賞

「三代鉢」 中村郁恵

(北海道札幌市)

「母の東京一九六四」

金田一淳

(青森県三戸郡)

「終に見た手鏡」

家森澄子

(岡山県倉敷市)

「ファスト」 宮尾美明

(愛知県安西市)

ドキュメント優秀賞

「ウンドウカイという名のフェスティバル」

末永卓幸

(ミクロネシア・チューク)

奨励賞

「桜の聲を聞く前に」

中條 響 (長野県長野市)

「挽歌」

苑田有子 (広島県広島市)

「あいつのメロディー」 ツキノマコト (東京都北区)

「都忘れ」

小林宏子 (北海道札幌市)

「鍵の開いていた部屋」 森崎律子 (大阪府大阪市)

「白い肌の記憶から」 植田郁子 (京都府京都市)

「メキシコの地下鉄」 本間芳江 (東京都武蔵野市)

「父は語らず」 友 修二 (茨城県笠間市)

「花嫁の鱈」 早月春美 (富山県中新川郡)

「積み団子」 青地久恵 (北海道釧路市)

「ひよんと死ぬるや」 斎藤はな絵 (北海道岩内郡)

「今だから話せるベニヤ板の思い出」

林 須磨 (京都府城陽市)

「スケート部『五部』」 武藤蓑子 (東京都多摩市)

「われ目」 洗狐 (神奈川県横浜市)

「星の旅人」 神谷 恵 (熊本県天草市)

「彼方の我が家」 稲葉真季 (東京都世田谷区)

「循環」 七尾美日 (埼玉県三郷市)

「首吊り遊戯」 六枝オリヒメ (香川県坂出市)

「あわや、特殊詐欺に遭いかけて」

牧 康子 (東京都杉並区)

選評



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農文学賞受賞
戯曲も多数ある

最後に何を伝えるか

高齢者の願い

水木亮

今年の応募作品の全体の感想は、作品の質的レベルは上がったが、例年のような独創的な断トツの作品がなかった。しかし、高齢者が自分の人生を振り返り、どうしても書き残しておきたい作品が多く見られた。そこに希望があり、高齢者と歩むこのコンタールの願うところでもあり、とても良かったと思う。以下に残った作品について感想を述べたい。

「奇妙な依頼」

平尾富雄

最優秀に選ばれたこの作品は、貴重な南北朝鮮の交流の

次に奨励賞で私が印象深いのは、次の作品である。「都忘れ」
小林宏子

人生を「花」と共に生きてきた自分の生命力を、「都忘れ」にちなんで後世に伝えたいというその熱い思いが伝わる秀作である。

「白い肌の記憶から」

植田郁子

奨励賞に選ばれたこの作品は、中学生のとき自分を虐めた男性が、実は不幸な家庭で胃潰瘍を病んでいたこと。その彼が妹だけを愛した事実を、歳月を経て愛しく思う気持ちを書いた。

年輪の奥ふかさを感じさせるエッセイである。しいて言えば、その少年に「ありがとうね」と手を合わせる作者の動機が弱い。説明ではなく描写でしっかり伝えることが大事だと思う。

「われ目」

洗狐

高校生の作品である。思春期の少女が父親を見つめる視線が独創的、ユニークで読ませる。これから期待される。

「父の玉子とじ」

鎌田誠

以下印象に残った佳作作品について触れたい。誰にも人生を振り返るとき、自分でしたこと後悔することがある。父親が心を込めて作った「モヤシの玉子とじ」にありがとうと言えなかった自分。その後悔が一三回忌を経て心に残る気持ちをよく書いている。

「女医は何人殺したか？」

鈴木正治

手伝いをした記録が書かれている。よい仕事をなさったと思う。タイトルは「石油缶一杯のメンタイコ」でもよい。「母の東京一九六四」
金田一淳

優秀賞に選ばれたこの作品は、オリンピック選手を世話した両親の思い出を書いた。描かれている母親の温かい思い出を、こうして文章にした息子がいることを、あの世の母親は喜んでいことだろう。

「ファスト」

宮尾美明

優秀賞のこの作品は、四〇代で脳出血で倒れた夫の介護を三〇年もしていた作者が、ある朝自分の身体に奇妙な気配を感じ、救急車を自分で呼んで入院し、脳梗塞の治療を受けて、一週間で夫の介護もあり再び自宅に戻る。実際にリアルに高齢者の日常の生きざまを、息もつかせず読ませる。身体の自由が利かなくなり、尿を採取してくれたのが自分の教え子であった奇跡。高齢者はいつ自分がそういう状態になってもおかしくない。その現実をよく伝えていて、広く高齢者が生きる上での参考にもなる。「ファスト」という脳溢血察知のキーワードを口ずさみながらの、再出発した作者のアトリエの姿は、残された生きることへの貴重な時間を私たちに感じさせる。

ガンになった妻の治療について、対応する医者がありかたについて書いた。タイトルはやや感情的だが、患者の身になればその気持ちはわかる。病気の妻に寄り添う夫の切ない気持ちがよく書かれていると思う。

「返信」

相澤真理子

韓国ドラマによく出てくるような憎悪の家庭環境が書かれている。そういう厳しい人生も存在するのかと驚かされる。作者の返信が痛快である。

「父のお経」

近藤幹夫

白内障になり行方不明になった柴犬「リュウ」の話で、これを取り巻く家族の思い、死んだりユウを可愛がった老いた父親の姿など、犬猫を愛しむ高齢者には切ない人生の時間を伝えている。

人間一度きりの人生を悔いなく終えるために、自分の一生で忘れられない思い出を記録することは、その人の人生の終活でもある。何も残さず死ぬのもよい。しかし記録しておけば誰かが読む。呼んだ人は、ああ、そういう人生もあったのかと改めて思う。最近親せきの個人の膨大な書物整理をしていて、いろいろな新しい人生の発見があり、楽しい。今回入賞こそしなかったが、貴重な経験を書かれた高齢者の作品が多かった。それはとても大事なことである。来年もいろいろな作品を読みたい。



いがらし つとむ

- 1949 山梨県生まれ
- 79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
- 98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
- 2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

キャリア層の充実

五十嵐勉

いつも三〇〇人前後の応募者数があったエッセイ賞だが、今年に限って一六七篇と激減した。これは「公募ガイド」に載せてもらえなかったためだろうか、いい作品もそれに比例して減るかもしれないなどと懸念していたところ、そんな数字の懸念は吹き飛ばすくらい、いい作品が押し寄せた。特に奨励賞と佳作の層は分厚く、どれを奨励賞にし、どれを佳作に落とすかで苦しむほど、良作が目白押しだった。

ただ、若干、いつもより優秀作が少ない結果になった。しかも、優秀作は常連が揃い、これまでキャリアを十分に示してきた筆者が勢揃いしたような形になった。ニュー

フェイスも期待したが、少し文章に薄さが目立ち、キャリア層を打破するほどの勢いは持ち得なかった。今回は若手に大いに期待したい。

この二、三年、最優秀賞に決定的な優秀作が現れないことも憂慮していたが、今回は大迫力の作品が登場し、胸を撫で下ろした。その作品は平尾富雄の「奇妙な依頼」で、北朝鮮と韓国との間の手紙を日本で中継して届けるという希少行為を題材にしたものである。一九五〇年代の朝鮮戦争のために国交の断絶したままの韓国と北朝鮮の間は、互いに手紙が届かない。むろん電話もできない。肉親が分断されたまま、三八度線で生き別れのまま暮らしている現実が、ここには手紙を象徴して、浮かび上がってくる。北朝鮮からは日本に手紙が届き、日本から韓国には手紙が届く。このルートを使って、数十年を超えた家族の分断の悲痛な叫びが交わされる。朝鮮戦争の、いまだに生きて裂かれる者の肉声が、二十一世紀の現代に響き届いてくる。そこには朝鮮民族の家族の情愛の濃さも流れているが、手紙によって慟哭するその現実、携帯電話や、ラインや、電子メールで簡単に繋がりや交信を得られる現代の生活の中で、逆に人間の繋がりや根底の力を浮かび上がらせてくる。二重にも、三重にも、我々の足元を脅かしてくるものがある。同時に、人間にとって何が真に大切なものであるのかも、照射してくる。感銘を受けた作品だった。

佳作

- 「夫が撮ったアフリカライオン」 松原泰子
- 「平岡小学校」 栗山佳子
- 「群れ」 田中浩司
- 「善意の表し方」 平野靖雄
- 「本物」 有澤かおり
- 「就労継続支援B型における『工賃』という呪い」 松橋雅鳳
- 「父のお経」 近藤幹夫
- 「キンランの階段」 高尾周一
- 「最南端高校・教師おとひめ」 藤田 侃
- 「主婦売春の汚名を着せられた」 紙屋里子
- 「シャツをはいた友」 菱川町子
- 「結局ブラック企業」 三上櫻子
- 「消えた弾」 虎姫
- 「嘘の箱」 マツイアキラ
- 「返信」 相澤真理子
- 「心残りだったろうなあ」 三木俊平
- 「母恋」 安部としき
- 「タンゴ……それは人生」そして母子の共戦譜」 青柳みすず
- 「父のザンネン」 諏訪崎はるえ
- 「食」―学生時代の思い出」 野宮健司
- 「紙芝居へ込めた想い」 春木美子
- 「今しかない感情を書く」 えりー

- 「オマール君の墓」 田中美晴
- 「父の玉子とじ」 鎌田 誠
- 「日本&ウルグアイ、タンゴの架け橋となつて」 小原みなみ
- 「姉妹のウナギ」 春本幸洋
- 「かいわれサラダ」 小谷 桜
- 「まろと私」 古池真矢
- 「人のころには闇がある」 峰川修一
- 「嗣げない志」 上野 達
- 「独り言ち(ひとりごち)」 丸山順子
- 「根源乃手、吉本隆明と吉増剛造をめぐって」 弟子丸博道
- 「揚げパンの幽霊」 小島遊要
- 「笑顔の達人たち」 戸浦次郎
- 「雨男との対決」 鈴木邦夫
- 「シベリア鉄道の旅1974」 竹本祐子
- 「ははの記憶」 岩田ふじこ
- 「苦難を越えて」 熊谷和代
- 「小林秀雄の告別式」 西島雅博
- 「女医は何人殺したか？」 鈴木正治
- 「カーテンをしっかりしめて」 丘田ミイ子
- 「夢解き」 山田まさ子
- 「君死に給うこと勿れ」 岩崎 裕
- 「切り株を」 エビハラ
- 「兄」 益田和則

戦争に関する作品がいくらか復活した観のある今回だが、その面からも異色のレポートとなっているのは、末永卓幸氏の「『ウンドウカイ』という名のフェスティバル」である。トラック島は旧ドイツ領であった島が、第一次世界大戦の結果、日本の委任統治領になり、その後太平洋戦争では、海軍の一大根拠地となつて、戦艦大和や武蔵の連合艦隊の出撃基地となつてきた。現在はミクロネシアという新たな国の一部となっているが、ここに現在も、日本統治時代の文化の遺産が「運動会」として息づき、元来の民族の闘争本能の発露に大いに役立っているという話である。この話は新鮮で、ミクロネシア現地で生活している末永氏でなければ書けない興味深いレポートとして読ませてもらった。これは特別に「ドキュメント優秀賞」を設けて称揚することとした。これからもミクロネシアからの貴重な報告を届けてほしい。

今回読ませてもらつた候補作の中で、特に文章が傑出している二作があった。中村郁恵氏の「三代鋏」と中條響氏の「桜の聲を聞く前に」である。「三代鋏」は父、母、自分と三世代にわたつて生垣を刈る話だが、そこに紡がれる文章の息づきは優れていて、名文の域に達している。「小さな盥に汲んできた水を指先に含ませ、砥石の面に数滴ずつ落とす。滴は、陽を反し微細な光を庭の縁に鑲めていった。水気と呼び覚まされた砥石の面が、銕を待っていた。」

の円谷や君原、ハードル走の依田郁子が生き生きと登場し、またその後の自殺事件も、回顧の中に陰影を深くして蘇ってくる。ベテランらしい一作で、支持を集めた。同じく優秀賞の家森澄子氏「終に見た手鏡」は、戦争で父を失い、後を引き受けて四人の子供を育てなければならなかった母も過労で死に、姉妹バラバラに生きなければならなかった戦後の家族の運命が、一つの手鏡によって鮮や

という部分などには感心した。これだけでも優秀賞に値する。まとめ方も以前よりうまくなり、技量を上げていることを確信した。銕によって受け継がれる家の一歩と行爲とを、失われる変遷に重ねて、哀惜をしっかりと残している。

「桜の聲を聞く前に」は、「桜には旋律がある。」から始まつて、儂さを帯びたトーンが淡い色で流れていく。「春のやわらかな風を感じる頃に、桜の聲を聞きたいのだと、彼女は話してくれた。生ける花は季節によって異なるが、桜を生けることはない。生けた桜ではなく、大地深くに根をおろす桜の聲を聞きたいからだと言っていた。傍らの桜の幹に手を添えて、自分の心に迷う時、桜の聲が正してくれるのだと、静かな声で言っていた。」この主旋律は最後まで失われることなく、儂いものへのやさしさを帯びて、人世の風の中へ消えていく。現象の色の、失われていくからこそ美しい何かを残して、流れ去っていく。文章のトーンには深い魅力がある。残念ながら他の選考委員の評価が得られず、奨励賞に留まつたが、私はこの作品を高く評価した。この文章を大事にして、これからも書き続けてほしい。

金田一淳氏の「母の東京一九六四」は、家の苦闘の変遷の果てに東京オリンピックの選手強化センターの管理人に就く話で、当時有名だった選手が何人も出てくるのが懐かしい。表舞台の栄光の影に触れる味わいも深く、マラソンかに浮かび上がってくる、感銘を呼ぶ作品である。母親から最も遠く離れる妹に、形見として手渡す手鏡が、母の愛情を深めて蘇ってくる。家森氏の原点を示す作品として、評価せずにはいられなかった。宮尾美明氏も何度か受賞しているベテランだが、今回は「ファスト」という脳梗塞を題材にした、これまでとは違った作品を提出してきた。脳梗塞を題材にした作品は、

入選

- 「父母と私」 田浦チサ子
- 「何も得られなかった実感」への肯定に関して」 古井ふきこ
- 「あつ君も卒業したよ」 倉沢辰子
- 「苦境に立たされた兄姉を想う」 佐高 源
- 「新『たら・れば』宣言」 武中 彩
- 「二刀流」 九条之子
- 「燃え尽きるな小児科医」 秋谷 進
- 「母の残したつれづれ記」 松谷直美
- 「『おけい』の墓」 ゴルビー長田
- 「サレヨ」 瀧沢 鈴
- 「本のある風景」 中牟田智子
- 「父に近づく」 野澤一彦
- 「冬の庭」 小倉一純

- 「暮終い」 村松佐保
- 「騙されたほうが悪い？」 高橋ひとみ
- 「プロフェッショナルとは？」 美馬 楓
- 「風の揺らめき」 山本彩冬
- 「赤い椿」 前岡光明
- 「ウィズコロナに向かって」 常風ハル
- 「生きやすい未来に向けて」 こいちゃん
- 「正解と友達」 田中 紬
- 「新しい京都へ」 大幸信明
- 「世界のヒロシマ」 とある女子高生
- 「新聞と私」 佐生綾子
- 「生きていて、生きるのが正解じゃないと思ひながら、生きる」 原水 澤
- 「鬱の手記」 北川 聖

エッセイ賞でも、銀華文学賞でも多数寄せられるが、最初の発見の時期だけに特化して、絞って作品化した例は稀有である。その治療は最初にどれだけ早くそれを知り、行動するかにかかっているという警告は、この作品によって確かに迫ってくる。水木選考委員の強い「推し」に同意した。奨励賞に留まったが、「あいつのメロデー」(ツキノマコト)は、バンドの仲間の死を、熟年でのグルーブの復活に重ねて鮮やかに蘇らせている。青春時代のデビューの夢と不慮の死を交錯させ、年を経て回顧と共に復活させている手腕は、成功しているし、読ませられるが、幽霊譚にしてしまっている強引な巧さも感じないではない。「あいつのメロデー」というタイトルも、腰を落とした定着性が薄く感じられる。私は当初優秀賞でもいいと思ったが、再読しているうちに、その点の薄さが気になった。しかし力はあるので、さらにいい題材で挑戦してほしい。

今回奨励賞レベルの作品は多く、「押し寄せた」ほどの観があるが、その中で特に印象に残ったものをいくつか挙げておきたい。

「メキシコの地下鉄」(本間芳江)は、過去のメキシコ滞在を伝えた好レポートで、メキシコの事情が生き生きと立ち上がってくる。なぜ現在でも、メキシコからアメリカに密入国しようとするのか、なぜトランプがメキシコ国境にフェンスまで作るうとするのか、国家的貧富の差が昔も今

写し絵のように戻ってくる。戦争の記憶が失われ、乏しくなりつつある現在、貴重な記録として迫ってきた。

「鍵の開いていた部屋」(森崎律子)はあるピアノリストの挫折と奇跡の物語を、うまく再現したものである。強盗に入られ、命を奪われそうになったピアノリストが、相手を宥め、世の中に更生させるストーリーは感動的だ。挫折の経験を通して説得する勇氣は、鼓舞される物がある。森崎氏のジャーナリストとしての資質も再認識した。

「循環」(七尾美目)は、精神病院への入院から、自然によって自分と世界を取り戻し、草花を育てることを通して大きな循環の中に目覚め、真の生命力を得ていく体験は、さすがに命の覚醒感と呼び起す。タイトルはもともと具体的なものがあるが、この体験はかけがえのない輝きを放っていることを感じた。ここからさらに新しい世界が広がっていくような期待を持たせる。

佳作の中にも、「文芸思潮」誌上に載せたいいい作品がたくさんあった。なるべく多くを掲載する方向で進めることを伝えておきたい。

いつもこのエッセイ賞の審査を通してたくさん作品に接するとき、いかに多くの生きることがあり、人生のそれぞれの苦闘の華があるか、ということを感じずにはいられない。励まされる。文学とはそういうものの共有であり、それを通してその共感のうちに、傷みを分け、励まし合う力

も変わらずに存在するということが、説得力を持って浮かび上がってきた。こういうレポートは価値がある。興味深く読ませてもらった。

また佳作には留まったが、「シベリア鉄道の旅 1974」(竹本祐子)も貴重な記録として深く胸に残った。シベリアの果てしない平原を走る鉄道の旅が、ゴトンゴトンという音とともに旧ソ連の時代を蘇らせてくる。それは今も変わらないロシアの姿として、陸の遠い旅を夢見させてくれた。

特異な題材としては「首吊り遊戯」(六枝オリヒメ)も強烈だった。この世に現実に「死にたい」人がい、死ぬことを試みているとは、にわかには信じがたかったが、「死ぬために」自衛隊に入るという実践があり、具体的な道具による研究があるという事実は、人間には「タナトス」という死への衝動が存在する心理学の根拠を見せてくれている気がした。

林須磨氏の「今だから話せるベニヤ板の思い出」は、昭和二十年代のアパート生活の様子が生き生きと描かれていて、貧しかったその頃のことを、逆に人情味豊かに蘇ってきて温かさを誘った。現在失われているものが浮き彫りになってくる。

「挽歌」(苑田有子)は終戦間際の満洲で、自決した若い将校の事件を描いて、印象深い。当時のハルピンの空気が

であることを感じる。それぞれの人生の奮闘を願い、生きていることを享受する方向へさらに花開いていってほしいことを願っている。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002 「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

ソムリエのテイステイングが如く

都築隆広

今年応募総数が少なかったがゆえに、腕に自信のある猛者達の投稿ばかりだった。

五段階評価でいうところの四前後の作品が非常に多く、上位入賞レベルのエッセイだらけなので、際立った特徴のある作品を見抜くのが厄介だ。他の選考委員の採点が出たときに、自分だけが浮いた点数を付けていると、「やべ、ミスったか?」と審美眼を試されてしまう。さながらワイン品評会の如し。「ソムリエのテイステイングかよ」と眩

きつつ、原稿を読み込むのも例年以上の難易度であった。それでも、最優秀賞は「奇妙な依頼」にすんなり決まる。人情もののエッセイとしても、北朝鮮の厳しい状況を伝えるノンフィクションとしても読める点が評価された。私としては結末で語り手が受け取る意外なお礼の品が、このエッセイにリアリティーとあたたかみを与えてくれている気がした。

ナンバーワンはすんなり決まったが、困難なのは優秀賞である。なにせ、自己基準に当てはめたところ、最終選考に残った作品の七、八割は優秀賞か奨励賞レベルなのだ。その中でも選考委員達の平均評価が高めだったのは、昭和の東京五輪の前日譚を、選手達の世話をしていた家族の視点から描いた「母の東京一九六四」。五輪と関係のない前置きの長さが気になるも、主軸となるのが母への想いであるということこそ主張する選考委員が多かったため、なるほどと納得した。

同じく優秀賞「ファスト」は夫の脳出血を経験していたから、己の脳梗塞には対処できたという話。読者への注意喚起としても良いエッセイである。だが、作中で登場する「ファスト」の標語が想定以上に選考会では不評だった。この人の場合はこれで有用だったが、手遅れになる人も多いのだから、理想論過ぎるのではないかと意見も出て、肯定派と否定派と中立に分かれ、議論が白熱した。どの意

心させられる。サガンやラディゲや平野啓一郎や大江健三郎の処女作みたいな突出した表現はないものの、読み終わってから、タイトルを眺めて、「あっ」と唸らされた。昨今の芥川賞なら、すぐにも狙えるセンスでは？ といったら、褒め過ぎだろうか。

個人的に推薦したい作品は奨励賞「星の旅人」。謎の奇病で身体が動かなくなった筆者の入院生活を描いたもので、ユニークな会話の数々に声を出して笑ってしまった。長年、エッセイ賞の審査に参加しているけれど、ギャグが入った応募作というのは非常に少ない。それだけギャグエッセイは難しく、評価もされにくいジャンルだ。そこは応援したいのだが、病気に関しては最後まで謎が解明されない。その謎も踏まえ、上手く結論付けはしているものの、やはり闘病ものは病名が明らかになってくれた方が読者もスッキリする。ただ、こればかりは実際に苦しんでいる作者には、どうにも出来ないだろう。

さて、最終選考作品が高レベルだらけとなった今回のエッセイ賞の状況も異常ながら、このまま平均レベルが上がり続けられ、将来的には最優秀賞レベルで応募作が占められる時代も訪れるのではないか。そのときは日本……いや、世界一のエッセイ賞として、我々、文芸ソムリエ達も極上のワインを舌先で転がし、葡萄に染み込ませるが如く、傑作の原稿に埋もれて嬉しい悲鳴をあげそうだ。

見が正しいかはさておき、討論の争点となるのは、良い作品たる証拠であろう。

続いて最優秀賞「三代鏡」。人情噺系のエッセイであるも、私は登場する隣人の性格の悪さばかりに眼が行ってしまった。しかし、五十嵐編集長から文章がずば抜けて良いと指摘され、文体や描写力への認識の甘さに恥入りつつ、「ソムリエのテイステイングや」とあらためて、選考の難しさを痛感させられた。

奨励賞「彼方の我が家」は伊東で小さな旅館を営んでいた家族と、寅さんのような不思議な長期滞在の客との思い出を描いた、どこか懐かしい感じのするエッセイ。上位に来るかと思いきや、意外と選考委員支持が集まらなかったのが残念だった。同じく奨励賞「あいつのメロディ」はアマチュアバンドのメンバーが語る、怪談とも奇譚ともいべき奇想天外な内容。選考委員評価は高かったにも関わらず、作者の略歴に「上方落語台本大賞にて大賞受賞」と書いてあったがために、新作落語を聴かされた気分になり、リアリティーが損なわれてしまった。受賞歴の明記は慎重に。

十六歳の女子高生の作「われ目」は、ある危機的状況にあってもユニークな父と娘の関係を描き、こちらも奨励賞。私的には今回、最もインパクトの強い作品であった。自分が十六歳の頃は、ここまで文章が上手くなかったよなと感



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書 「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

筋立てをこえて

三神 弘

筋立てをこえて、説明や意味から離れて、作者の語り方や、表現に、読む楽しさ、面白さ、もうひとつの物語を見つけた。

金田一淳「母の東京一九六四」は、老人ホームを訪ねるたび、「待っていたかのように」息子の「私に語りはじめる母の思い出」である。下北半島で生まれた母は、尋常小学校を卒業すると五人姉妹であったこともあり、小母と一緒に北海道に渡り、漁村に辿り着いたという。やがて娘となり見合い話があり、「二人は否も応も言えぬ間に結婚させられ」、家族もできるが、父が療養をするなどして「金欠」に陥り、先祖代々の土地も売り払う。「息子の私」も、そうしたなかで育ち、与えられた境遇のなかで育つ。

息子に語る母の思い出は、尽きることがない。「北から

帰って落ち着くつもりが「こんどは南の伊豆大島のホテルに就職し、売店や厨房で働くことになる。やがて、トレーニングセンターの管理人に任用される。読者には、目まぐるしく、溜息の出る遍歴である。やっと、伊豆大島の椿も海も見えてくる。

世のなかには、一九六四年の東京オリンピックを迎えようというときである。おのずと、時代の華やかさと夫婦の生活ぶりが比較され、読みどころになっていく。さて、このトレーニングセンターに、オリンピックの陸上競技候補者たちが、暑さに順応するために合宿にくる。ここから母と選手たちの交流が描かれ、大忙しの管理人も、オリンピックを目指しているかに、すでに北の人ではなくなり、大島の人となり、その奮闘ぶりは、愉快で、懸命だ。

作品は、母の半生だが、読み取るべきは、思い出を語る母と向き合い、母の声に耳を澄ます「息子の私」の姿である。ある日母は「あの頃はみんながいい笑顔だったのよ」と洩らし、「私」は「東京一九六四年の日々は、母にとつて生涯で最も幸せなときだったかもしれない」という安堵と、感慨を得る。作品は「息子」の愛情に支えられている。

早月春美「花嫁の鯛」は、「結婚した年の暮れに花嫁の実家から婚家へ鯛を丸ごと一本贈る風習」を描いていく。

この作品には、作者の立っている場所や、環境、風土、土地の感覚がある。風習は昔から今日に続いているものの、

て帰った」ととき、伯母が「あれがお父と教えてくれた」という。父はいつも、「私」と兄に「撃たれた弾がまだ体に二発残つとる」と「人ごとの様に話した」という。子供相手に、戯れごとをひとりだけで楽しんでような風貌が、読者には浮かんでくる。父が他界し茶毘に付した後、弾を捜したが見つからない。読者は、本当に撃たれて、弾が残っていたのか、歳月を経て、残っているはずがないと詮索することになる。弾はかたくなに戦争を語らなかつた父の無念さの塊だったとも思えてくる。兄は「弾はもう灰になったんじゃ」と呟く。「私」は、「あの世で父に会ったら、弾はほんまに消えたん」と問うつもりだ。父の体験が、戦争が、何もなかったかのように、架空のことだったように、手品のように、灰になっていく。

鎌田誠「父の玉子とじ」は、母を亡くした後の家族が描かれる。父は「酒もたばこもやらない国鉄職員で母の看病で十キロも痩せ」姉は「お母さんの代わりはできない」と家を出た。家庭教師をする「学生の私」に、父が初めて、そして一度きりの料理を作ってくれた。その「もやしの玉子とじ」が、忘れられない。父と息子の何も話すことのない「場」が印象に残る。いまは、母もなく、父もない。作品は筋立てをこえて、読者にもうひとつの物語を手渡ししていく。

注目した作品、面白い作品は、的確な言葉選びをしてい

鯛をさばくの困り果てるという「わたしたちの世代」のいささかの困惑ぶりからはじまり、鯛の解体までが紹介されていく。さらに、鯛を取り囲む土地の人たちの話題を、肉声を聞きたい、間近にしたい。読者も、「場」に参加したい。そのことで主役の鯛が威厳を正していく。

春本幸洋「姉妹のウナギ」は、ウナギ屋の二階で「ウナギ好きな伯母と母がよく大笑いをしていた」と語り出される。話題は終戦直後、伯母と母に連れられて出かけ川に落ちた「私」のことであるらしい。食糧難で、川魚やウナギを獲りに行ったようだ。ここから作品はウナギに関するあれこれに転じていく。仕事で出かけたとき地方の駅前で食った鰻井から、土地による蒲焼きの工程、味の違いを紹介し、また、万葉集のなかに「夏痩せに良い」という推奨を見つけたりする。ウナギに関する探究はさらに「日本人とウナギの付き合いは縄文時代の早期にまでさかのぼる」と、突き止めて、読む楽しさを提供する。伯母と母譲りなのか、格別のウナギ好きである。作品は筋立てをこえて、エッセイという形式の自由さを得て、山奥の「じっくり炊いた甘露煮のウナギ」の味にも辿り着く。伯母と母の大笑いが聞こえてくる。

富登千恵子「消えた弾」は、まだまだ、どこか家庭にもある戦争の語り伝えである。「父は野戦病院から送還され杖に縋って立つのも苦しうだった」「母の告別式に遅れる。作品作りとは、書き、読みながら進めていくことなので、作者のなかに、書き手と読み手がいることになる。どうやら、作者には、書き手よりも、頼りになる読み手をもつことのほうが、導きや、励ましになるようだ。

鉛筆も大事だが、消しゴムも、尊重しなければならぬ。注目した作品、面白い作品は、推敲を経ていることがわかる。そして、ひとつの作品を計画し、書きはじめたときよりも、書き終えた後のほうが、書き手は充実しているはずだ。

はじめから作者はいない。書き終えたときに作者が現われる。これが、書くことの喜びだ。

